

## 『うつほ物語』と近世国学者

——文化三年補刻本『うつほ物語』絵入版本の書き込みから

ムトウ 武藤 ナガコ 那賀子 (学習院大学人文科学研究所客員所員)  
トミザワ 富澤 モエミ 萌末 (学習院大学大学院博士課程)

『うつほ物語』は、『源氏物語』よりも数十年早く成立したと考えられている、現存最古の長編王朝物語である。現在は尊経閣文庫蔵前田家十三行本が善本とされ、これを基に校訂された本文が多く読まれている。また、この他にも天理大学附属図書館蔵毘沙門堂本、静嘉堂文庫蔵紀氏本、関戸家旧蔵俊景本、宮内庁書陵部蔵桂宮本、静嘉堂文庫蔵浜田本がある。そして、これらの写本とは別の本文を持つ写本を基に作られた版本もある。

『うつほ物語』の版本は、延宝5年に全30冊20巻が刊行され、後に文化3年に補刻本が出された。版本に使用された本文は、現存する写本のどれとも異なり、また本文に多くの問題を孕んでいて読むのが困難なことで知られる。このためか、現在『うつほ物語』の版本の研究は全く行なわれていない。しかし、全国にある『うつほ物語』の版本には書き入れのあるものが多くあり、この書き入れを翻字することによって、『うつほ物語』がどのように読まれていたかがわかる。

本発表では、江戸末期に『うつほ物語』の研究がどのような人々によって行なわれていたかについて、『うつほ物語』の版本の書き入れを基に論じてゆく。

その方法として、学習院大学日本語日本文学科蔵の『うつほ物語』の版本(文化3年補刻本)の書き入れを中心に据え、同所蔵の延宝5年開板本や、その他、全部で13本の『うつほ物語』書き入れ版本を比較・検討する。書き入れのある

版本には、書き入れをした人物の名前が記されているものがあまりないが、書き入れの内容から、書き入れをした人物同士が近い文化圏にいたか否かがわかる。

学習院大学日本語日本文学科蔵の『うつほ物語』版本には、田中道麻呂・平（村田）春海、源（佐々木）弘綱、生川正香、井上文雄の名前が書かれている。本居宣長の弟子にあたる国学者たちがどのような経緯によって、どのように『うつほ物語』の版本を読んでいたのかを示したい。

# 否定的な母親像と暗澹たるふるさと

— 坂口安吾から観た「出自」論 —

デウイ アングラエニ  
DEWI Anggraeni (インドネシア大学専任講師)

本発表では、坂口安吾が1930年代に発表した自伝的、半自伝的な代表作品を中心に、彼の「出自に対する考え方」を考察する。便宜的にこれを「出自観」と呼ぶ。特に、「母」と「ふるさと」に対する概念の分析を試みる。人間は「母」から生まれ、「ふるさと」に誕生するものであるため、「母」と「ふるさと」に着目することで、安吾の出自観を探る。

海外では、日本近代文学における「母」と「ふるさと」に関する先行研究は少ないが、本発表では、その中からStephen Dodd (2004年)とSusan J. Napier (1996年)という2名の日本文学研究者を取り上げる。さらに人類学者のJennifer Robertson (1997年)についても触れる。

Doddは、明治30年頃から昭和戦前までの文学作品に描かれた「ふるさと」について研究し、当時の「ふるさと」を「失われつつある伝統的な日本への回帰を象徴する比喩的空間」と定義した。一方Napierは、戦前の文学作品に描写された「母」を「伝統の受け皿」と例えている。氏によれば、「女性」は、近代化する日本に疲れを感じた男性達に「癒し」を与える存在であった。さらにRobertsonは、「ふるさと」とは、暖かさや母性を感じる架空的空間だと述べている。彼女は、Napierと同様、「母」を「伝統の受け皿」として重視していた。

このように「母」と「ふるさと」は、一般的に暖かさや癒しや安心を与える空間であり、郷愁の念をもたらす。しかしながら、安吾が描く「母」や「ふるさと」は、「癒しの空間」とは対照的に異なる。本発表の対象作品を考察すれば、安吾の出自観が破壊的なことは明白である。もちろん、人間は何人も自らの「出

自」からは逃れられない。ただ、個々人の「出自」への思いは、必ずしも同じではなく、常に美しく描かれるものではない、ということの本発表を通し明らかにする。

# 永井荷風「監獄署の裏」試論

トネ ナオキ  
刀根 直樹（東京大学大学院博士課程）

永井荷風「監獄署の裏」は、明治42（1909）年3月、『早稲田文学』誌上に発表され、同年9月発行の単行本『歓楽』に収められた書簡体小説である。先行研究では、家・血族の問題（特に父子関係）、文明批評、西欧芸術（イプセン、ボードレール、ヴェルレーヌ）との関係などを中心に論じられてきた。しかし、漢文の引用や描写の問題、時局との関連など、なお論ずべきことの多い作品であると考えられる。

本発表では、まず「東坡書」ではじまる漢文の引用について、黄庭堅が蘇軾の書について付した跋文（「跋東坡書遠景樓賦後」）であることを指摘する。

次に、類似ないし同一の事物が異なる文脈で記される際、それが「私」自らに近いものであるか、嫌悪ないし忌避すべき対象であるかによって、イメージが大きく異なっているという特徴を、「職業」「蛙」「青苔」の描写に注目して考察する。なお、こうした描写の差異は単純な東西の差ではなく、洗練の度合いによって異なってくることも特徴的である。

また、「場末の」人々の生活を描写した箇所では、博物学的な記述が採用されていることも見逃すことができない。学問の対象であるかのような、冷やかかて一步ひいた（局外者の視点からの）記述であることが看取できる。事細かな観察と描写がかえって対象の後進性を際立たせる（観察者の優位性を表す）効果をもっていることが意識されたのではないかと考えられる。

さらに、時局を反映した記述（黄禍論、動物虐待など）が散見されることも指摘できる。特に動物虐待については、明治35（1902）年に「動物虐待防止会」が設立されるなど、当時の知識人之間において、看過できない社会問題であった。

以上のほか、光線・色彩の描写、母子関係などを踏まえ、新帰朝者であった荷風が、洋行によって意識化された局外者の視点から、いかに当時の日本の状況を捉え、作品化したのかについて考察を試みる。

# 藤本事件と「熊笹にかくれて」

—療養所内での救援活動の実態

ニシムラ 西村 ミネタツ 峰龍（名古屋大学大学院博士課程）

木々高太郎の小説『熊笹にかくれて』は昭和二十六年に発生した冤罪事件、通称藤本事件（現在菊池事件）を扱った作品である。藤本事件では犯人とされた藤本松夫氏がハンセン病患者であったために公正な裁判が受けられず、このような事態を憂慮して作家・弁護士・学者などを含めた救援活動がおこった。だが、救援活動はハンセン病患者が中心となっており、療養所からの外出を許されず、結果、救援活動はハンセン病療養所を中心としたものとなり、療養所外への広がりをみせなかった。これは、救援活動の中心となっていたハンセン病患者が療養所から外出を許されておらず、ハンセン病に対する差別も根深いものがあつたからである。その為、戦後におこった冤罪事件と作家との関わりでは松川事件（昭和二十四年）での広津和郎等の救援活動が人口に膾炙しているが、同じように作家が救援活動をおこなった藤本事件についてはあまり知られていない。先行論も少なく管見する限りでは、冤罪による死刑について言及する池田浩士「「世間」が死刑囚をつくる」（『死刑の「昭和」史』平成四年三月 インパクト出版会）や逮捕時の自白と地域社会のハンセン病差別との関係を論じた秦重雄（『挑発ある文学史 誤読され続ける部落／ハンセン病文芸』二〇一一年一〇月 かもがわ出版）のみである。両者とも作中の賀毛事件＝藤本事件として論じているが、賀毛事件＝藤本事件とする根拠については詳細に分析しているとは言い難く、ハンセン病差別に基づいた冤罪事件としての側面にのみ注目しており、作品の精緻な解釈がなされていない。また、療養所内での救援活動の実態についてもこれまで明らかにされてこなかった。そこで、本

発表では、賀毛事件＝藤本事件とする根拠を提示し、本作品の問題点を明らかにした上で、療養所内での救援活動の実態を明らかにする。



## ポスターセッション題目

『忠臣蔵』の翻訳

—日本人の今として、過去として—

川内 有子 (立命館大学大学院博士課程)

<資料紹介>鞍馬寺蔵・与謝野晶子自筆歌稿

関 明子 (東洋大学ティーチングアシスタント)

太宰治「誰も知らぬ」論

—オトメ共同体の外縁にある少女表象について—

王 盈文 (中華大学助理教授)

昭和十年代の「みやび」

大石紗都子 (東京大学大学院博士課程)

中国における星新一小説の受容

丁 茹 (鹿児島大学大学院博士課程)

国文学論文目録データベースの利用状況に関する考察

江草 宣友 (国文学研究資料館事務補佐員)